
戦国時代の女将軍

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国時代の女將軍

【Nコード】

N8444U

【作者名】

りんか

【あらすじ】

普通の女子高生がたまたまタイムスリップして將軍になる！？
階段から落ちてしまい、再び目を開けたら「織田 信長」がいた。
もちろん本物。

舞台は三英傑が活躍する戦国時代。

たまたまポニーテールをしていて男と勘違いされた百合。

百合は、信長に気に入られ家臣に無理やりされる。

どんどん歴史上の人物が出てきて困惑する百合の前に、とどめの人物が現れる。

それは、「豊臣 秀吉」と「徳川 家康」だった。もちろん本物。信長・秀吉・家康に振り回されながら武将として生活&成長（？）する。

プロローグ

あるところに、男勝りな性格の女子高生がいました。

女子高生は、歴史が大好きで、好きな歴史上の人物は「織田 信長」・「豊臣 秀吉」・「徳川 家康」でした。

でも、オシャレが大好き、友達と遊ぶのが大好きで、ほとんどの勉強が嫌いな普通の女の子でした。

ただ、不満なのは女の子の世界はグトグトでヌルヌル、言葉の裏に本当の意味がある。そんな上辺だけの世界なことでした。

好きでもないのに、「○○、大好きだよ。」といたり、みんな自分と仲がいい人がいないとなにもできなかつたり。そんな根性が全くなく、ブリッコをしている人が大っ嫌いでした。

でも、これをいうと仲間外れにされる。女子高生はそんなことが怖いのでした。

こういうのを見たことがある。女子高生はおもいだしました。

女子高生の親友が、前に同じことをいったのでした。

そうすると、あら不思議。親友は、どんどん仲間外れにされていくのでした。今まで、すごく仲が良くて、「ウチら、親友だよね！ウチらが離れるなんてありえないんだから！」といていたのに、陰口をどんどんたたいていくのでした。

女子高生は、女なんてこんなもんか。そうおもいました。

どうせ女なんて。こんな薄情で上辺だけの付き合いをするヤツなんだ。

女子高生は、絶望しました。

親友をおもいだしていた女子高生の前に、上辺だけの親友がやってきました。

「ねえ、一緒に勉強しない？ 今度テストがあるし。いいでしょ？」

断るとどうなるのかは知っていたので、女子高生はしぶしぶ承諾しました。

そのときはたまたま歴史の勉強をして、たまたま戦国時代が範囲でした。そして、たまたま歴史が得意だったので、たまたま「織田信長」・「豊臣 秀吉」・「徳川 家康」の資料を片手に勉強を教えていました。

勉強会が終わった女子高生は、たまたまその日が塾だったのでバツクを片手に行こうとしました。

しかし、直前までもっていた資料を全部たまたまバツクに入れてしまい、出発しました。

そして、たまたま転んで階段から勢い良く落ちてしまいました。

そうして、再び目を開けたら、そこはコンクリートの塊の街ではなく、見る限り緑の世界でした。

しかし、現代と違うところが何個もありました。

それは、男がまげを結っていること、鎧を着ていること、そして、目の前に織田 信長の本物がいることでした。

プロローグ（後書き）

今度はタイムスリップもんですか。自分でビックリです。

これは、お母さんの案から誕生しました。家のお母さんの妄想癖は怖いです（汗）。

今度は三人称にしようかなとおもっております。

だいたいが百合の説明ですね。でも、これも鍵を握っている（そうであってほしい）はずです。

これは、昔話風にやったので「でした。」の連発です。そこは軽く無視してください。

これはけっこう実話込みで、5割くらい私です。半分つくってるんですけど（笑）。

もともと一人称でグタグタな私の三人称は恐ろしいことになりそうです。

信長との出会い（前書き）

いろいろ調べたんですが、かなり情報まちがっているとおもいます。信長の性格もちゃんと調べたんですが……。

西暦の描写も30考えたんですが、まったく自信がありません。引っ掛かった方、ドシドシ感想でクレームつけてください。

信長との出会い

「ここは、どこだ……?」

彼女は、見る限り緑の世界に寝転がっていた。

しかし、彼女は自分がおかしくなつて幻覚を見ていると思つたらしい。

「えーと、ウチの名前は国分こくぶん百合ゆり。高校1年の15歳。血液型はB型。あつてるよね。うん、あつてる。」

自分で自分にプロフィールを聞いてどうするんだらうか。しかも自分で答えている。身分証明書を見たなら別だが、百合は1秒も文字すら見ていない。

ちなみに、「ウチ」とは最近流行っている言葉で、女子（小学校高学年・中学生・高校生）が主に使っている。これは、自分のことを呼ぶ言葉だ。同じ類には、「私」や「オレ」、「僕」などがある。また、百合は、まだ自分がおかれている状況がよくわかっていない。一瞬前まで、東京都の大会にいたというのに、瞬間的にいわゆる田舎に移動したことが。

「どうなつてんの、これ?」

百合は、ようやく気付いたようだ。

しかし、まだ彼女は草むら寝転がったままだ。もうそろそろ起きてもいいんじゃないか? とこれを見た者全員が思うだろう。

「よつこらしよつと。」

百合は、まだ高校生だというのに、初老を迎えたおじさんみたいなことをいった。

初老とは、40歳を過ぎた人のことを指す。よくテレビで1人の芸能人がネタに使っている。いまだにオレは初老になつても結婚できない、初老だからそんなことはできないから勘弁してくれ、などだ。

「御主は誰じゃ？ 名を申せ。」

男の声。しかし、昔風の言い方だ。

「……。」

「名を申せと言つておるじゃろう!!」

金属がこすれあう音。男は金属を構える。いつでも準備はできているとでもいいだけに。

「ねえ、アンタさあ、礼儀つてもんを知らないの？」

まだ百合は男の名を知らない。だからこんなことが言える。

「御主、いい度胸じゃのう。余の名は、織田 信長じゃ。」

しまった。織田 信長だつて？ 俗に言う失礼という態度をとってしまった。一步でも間違えれば、地獄行きだった。

男が金属を構えるのをやめた。

「国分 百合。」

そう言つてから、百合は後悔する。

私は歴史を変えてしまった。今からにでも時空警察のようなものが来るんじゃないか。

「国分？ 聞いたことはないのう。どこの出身じゃ？」

「東京。じゃなくて江戸。」

「江戸か。ならば余の力がまだ及んでいないのう。」

信長は、まだのところをとて強調した。将来は、自分の支配下におかれることをわかつているようなものの言い方だ。

「しかし、御主は男らしいのう。じゃが、そのとても短い袴はどうかとおもつもの？ どうも余には、それが男らしいとはちょっと言いにくいものう。」

男らしい？ 百合は信長にそういわれて顔がちよつとほころぶ。

現代の者にはよく言われるが、まさか信長に言われるなんて。

「短い袴つて。これは、ブレザー。」

「ぶれざー？ それは、江戸で今流行っている格好なのか？」

ここまで言われると、百合は真実を隠しきれなくなった。

「信じてもらえるかな。あー、でもなあ。」

「信じる？ 余は新しい物が大好きじゃ。なんなりと申すが良い。」

「じゃ、絶対に信じる？ 証拠を出せって言わない？」

「新しい物に証拠などあるか。」

百合は歴史を変える。織田 信長に自分の正体を教えることによつて。

「ウチは、タイムスリップ、つまり時空を超えてやってきた。」

「は？」

「だから、時空の探検的なものをしてここにやってきたってこと！」

「じくうのたんけん？ そんなことができるのか？」

「ウチは、知らない間になんか時空の探検してましたってことなんです！！」

あー、いつてしまった。ウチの人生は終わった。そう思ったときだった。

「新しい、実に新しい！ そんなことができるなんぞ、あっぱれじゃ！ 愉快、愉快！！」

一瞬、百合の思考が停止した。

そんなにすんなり受け入れられることじゃないっしょ？

「じゃあ、聞くけど。今つて何年の何月何日？」

「確か、永禄3年の皐月（きしげき）の1日じゃ。」

百合の脳内年表が広げられる。

西暦1560年5月27日か。

今まで百合がいた世界は、2011年7月。

つまり、百合は451年前の世界に立っていた。

信長との出会い（後書き）

前書きのとおりです。

しかも、昨日終わりまで書いたのにミスで全部消えるという事態が起きまして。

ちよつとエネルギーが搾り取られました。

ですが、よりよくなったはず（じゃないと私の心がダメになります）です。

女の幸せ(前書き)

いつものごとく、引っ掛かった方、感想コーナーへどうぞー！。

女の幸せ

「それはともかく、御主はいつから来たのじゃ？」

「451年後。」

「年号は？」

「平成。」

「平成？ うーん、知らんのう。」

「知るわけないだろ！ 知ってたらおかしいわ！？」

世間話のような話をしている。

信長は、話していてふと疑問に思う。

余に、こんなに親しくしてくれるやつなんぞ、どういう育て方をされたのかのう？ 未来では身分の違いがあるのじゃろうか？

もちろん、ない。未来では目上の人や見知らぬ人に対しては敬語を使うが、親などには使わない。目上の人には、学校の先輩や会社の先輩などが当てはまるだろう。

しかし、信長は知らない。だから、これまたふと、思いついてしまった。

こいつを、そばに置いて、未来の話をたくさん聞き出したいのう。それには、この方法が最適だった。

「御主、余の家臣にならないか？ 余は、未来の話をたくさん聞き出したい。たまらなくてのう。どうじゃ？」

さて、百合の心の中はどうだろうか。

三英傑の中で一番好きと言ってもいい信長が自分に家臣になれと言っている。これほどうれしいことはない。

しかし、信長は大事なことを忘れているのだろうか。

百合は女だ。この時代では、女は家族の為に嫁ぎ、そして跡取りを生む。これが女の幸せと言われてきたはずではないのか。これが普通だったのではないのか。

それが今、覆されようとしているのか。

これは、信長にしかわからない。

しかし、百合は「昔の女の幸せ」には反対だった。女は地位が低く、家を継ぐことができない。そんなことが、男ではないからという理由だけで、片付けられていいのか。ずっと疑問におもっていた。変えてやるつもりじゃん。

もう、歴史は変わってしまった。ならば、とことん歴史をかえてやる。まずは、女性の地位を上げてやる。

信長は、自分を見て、女でもこんなに元気の良いやつがいるのかとでも思ったのかもしれない。そう思った。

「いいよ。だけど、ウチを下に見るのは辞めてもら。もし、ウチを1回でも部下扱いしたら、名ばかりの家臣は辞める。それでいい？」

「別に構わん。じゃが、訓練を試みたらどうじゃ？ 体を動かすと気分も晴れやかになる。」

百合は、歴史以外は普通の成績だ。勉強は好きでもないし得意でもない。実技も普通な感じだ。でも、体育は教師が教師だから関わらないようにすると、

「国分さ〜ん、そんなんじや成績は最低のこがつくよ〜。」

と、どうもうざったい言い方で言ってくる。甘ったるい言い方ではなく、モゴモゴしていて、声自体がクネクネしているみたいだ。

そして、テストの点数にも難癖つけてくる。

親にはへこへこしてるくせに、特に女子生徒のブリッコをしていない者に態度がデカいこの教師が、百合は大嫌いだった。

百合は、いつの間にウチは心のなかで、体育教師のグチを言ってるんだらうと気を取り直し、続けた。

「ウチは体動かすの得意じゃないんだけど。そういうのを無理やり教えてくるヤツにも、ダメだって言われてるし。」

「まあまあ、そんなことを言うてない。やってみれば良い。」

広い。ここは、清州城だ。

信長が住んでるところって違うなあ。清州城に本物の信長がいることもポイント

百合はにわかに感動している。勝手にポイント付けするのもどうかと思うが。

「猿、皆の者を集めよ。」

猿。木下 藤吉郎。後の豊臣 秀吉だ。

その時、百合は秀吉の指が6本あることに気付いた。右手の親指が2本あったのだ。

こんなのは教科書にはないのだが、三英傑マニアは知っていた。

うわあ、ほんとに6本あったんだ。こんなのを生で見れるなんて、国分 百合、一生の不覚です!!

勝手にマニアックな感動をしてもらおう。こんなマニアックなことは、ほとんど誰も知らないだろうから。

百合は、信長に広い部屋に連れていかれた。

「その愉快的格好だと、皆に怪しまれる。余は、ここで待っているから着替えるが良い。」

部屋は広かったが、誰もいない。信長は、百合を気遣ったのか、部屋に上がってこなかった。

けっこう優しいじゃん。

資料には、厳しい人だとあったから、百合はそう思った。

「……、ん？ 資料？ あー！ー！ー！」

「どうした。」

「ウチ、いろんなものを未来から持ってきちゃったんだけど、どうしようー!ー!」

「どうしよう、とは？」

「隠さなきゃ！ これ見つかったらヤバい気がする!ー!」

「や、やば……??」

「ま、いいんです!! とにかく、これ隠さなきゃ!!」

「そ、それならここがいい。」

そういつて信長が指したのは、袂たもとだった。

そんな適当で大丈夫なのかと思うだろうが、けっこうこれが大丈夫なのだった。

そうして、百合と信長は本当に、そして大きく歴史を変える場所へ行くのだった。

女の幸せ（後書き）

長い間の放置。すいません、暑いとやる気しないんですよー。
なんて言い訳、通用しませんね。はい。

今回は、秀吉の名前に苦労しました。あいつ、改名し過ぎなんですよ。姓も名も昔の名残がないのが発見されました。

木下 藤吉郎 豊臣 秀吉

そういえば、知ってました？ 秀吉って指6本あったんですって。これ知ってた百合ってなんなんだろう（自分で作ってんのに）。

秀吉は、関白になる前まではこのことを隠さなかったらしいです。昔でも今でもそうなんですけど、こういう人は手の動きがしっかりする（？）1歳までに、多い指を切るらしいです。

これをやらなかった親&包み隠さなかった秀吉はすごいですね。しかし、関白になると一転します。指に関した出典は消し、肖像も右手の指を隠す体勢で描かせたそうです。

信長は秀吉を「猿」と呼ばなかった説があります。しかし、それはあくまで1つの説ですので、今回は有名な呼び名で書かせていただきました。

秀吉は信長の草履（？）を懐ふところで温めたのは有名です。彼はそれで信長の関心を引ききましたよね。

でも、秀吉がいつから戦に参戦したのか、疑問におもう方もたくさんいると思います。私ですね。

それが、かの有名な桶狭間の戦いなんです。

では、また今度。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444u/>

戦国時代の女将軍

2011年10月6日03時29分発行